

仲間関係位相尺度の作成と友人および親との関係の検討

中 島 浩 子 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

関 山 徹 [鹿児島大学教育学系 (教育実践総合センター)]

Peer relationships in pre-adolescence : Construction of the scale, relations with friends and parents

NAKASHIMA Hiroko · SEKIYAMA Toru

キーワード：仲間関係の発達、友人に対する感情、同調性

【要約】

本研究は、中学生および高校生を対象に、保坂・岡村（1986）の仲間関係の発達の仮説にもとづいて「仲間関係位相尺度」を作成した上で、友人に対する感情および同調性、親からの心理的分離との関連を明らかにし、仲間関係の発達の仮説を検討することを目的におこなわれた。その結果、仲間関係位相尺度の「ギャング」因子は「信頼・安定」「独立」「同調性」と、「チャム」因子は「信頼・安定」「不安・懸念」「同調性」と、「ピア」因子は「信頼・安定」「独立」および「葛藤」の少なさ、「親からの心理的分離」と関連があった。また、「チャム」から「ピア」への移行においては、友人への「同調性」が減少していくにつれて、友人から「独立」する感情が増加していく傾向があった。なお、「チャム」の仲間関係位相が優勢な時期において、「チャム」因子は「信頼・安定」と結びついていたが、優勢な時期を過ぎると「不安・懸念」の影響が強まることが示された。このように仲間関係位相は学校段階との関連があることから、年齢に応じて仲間関係位相を移行させている者のほうが、友人関係を快適に過ごしやすいと推察された。

1. 問題と目的

友人関係と学校適応に関するこれまでの研究において、青年期は友人関係の重要性が高まり、友人との関係が学校への適応感と最も関連していること（大久保, 2005）、良好な対友人適応は欠席願望を抑制すること（本間, 2000）が明らかになっており、友人関係は学校への適応に大きく影響していると言える。一方、友人関係は、中学生の学校ストレスの1つであり、抑うつ・不安感情と高い関連性があること（岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992）、中学生を対象にした研究において、対友人ストレスは不登校傾向に対して直接的に影響を及ぼしていること（五十嵐・荻原, 2009）などから、友人関係の状況が学校不適応の直接的な要因になっていることも明らかになっている。文部科学省（2015）の調査によると、不登校になったきっかけと考えられる状況として「いじめを除く友人関係をめぐる問題」は、小学校で11.2%、中学校で15.4%、高等学校で8.3%と多く、不登校の要因として友人関係が占める割合は大きいといえる。そこで、不登校傾向の予防のためには、友人関係など対人関係の側面への援助を心が

けること(五十嵐・萩原, 2009)や、直接的な要因となっている学校場面での対人関係上のストレスを低減させること(菊島, 1999)が必要であると考えられている。

また、特に青年期において友人との間に親密な関係を築くことは、日常を適応的に過ごすために特に重要である。青年期は、「第2の自我の発達段階、個性化の段階」(Blos, 1962)と位置づけられ、児童期までの両親との依存関係から離脱し、独立した個体となる時期である。そのため、青年期において仲間関係は、親からの自立にとまなう不安や痛みを乗り越えていく安全基地として、また、自立および自我の確立のために必要不可欠な存在である(保坂・岡村, 1992)。友人関係は、親からの心理的離乳を支える安全基地としての役割を果たしながら、青年期の発達課題である自我の形成にも大きく関係している。近年の不登校、学校適応問題をとらえる上で、青年期における友人関係の特徴をより詳細にとらえる必要がある。石本(2011)は、友人関係と心理的適応や学校適応との関連を検討する際には、青年期の友人関係の発達の变化を踏まえて、複数の学校段階における検討が必要であると述べている。そこで本研究では、友人関係を発達の側面から捉えた保坂・岡村(1986)による仲間関係の発達の仮説に着目した。

彼らは、キャンパス・エンカウンター・グループの事例研究における仲間関係の特徴として、ギャング・グループ(gang-group)、チャム・グループ(chum-group)、ピア・グループ(peer-group)の3つの位相があることを見出した。ギャング・グループとは、同一行動による一体感を特徴とする同性同輩集団で、男子に多く見られるギャング・エイジ(gang-age)の集団である。チャム・グループは、同一言語の使用による一体感の確認を特徴とする同性同輩集団で、女子に多く見られる集団である。「チャム」は、Sullivan H.S.(1953)が青年期前期における同性同輩の親密な友人を「chum」と定義したことに由来する。ピア・グループは、自立した個人として尊重し合い、異質性を認めることが可能な集団である。そして、児童期後期から思春期(青年期前期)にかけての子どもの仲間集団は、①ギャング・グループ(小学校高学年頃)、②チャム・グループ(中学生頃)、③ピア・グループ(高校生頃)の順に発達するとともに変遷するという。本研究では、この仮説にもとづいた尺度を作成することを第1の目的とする。

先行研究においても、この仲間関係の発達の仮説にもとづいて作成された尺度はいくつか存在する。齋藤(1986)は「ギャング・リレーション」「チャム・リレーション」「ピア・リレーション」の3つの因子からなる尺度を作成し、仲間関係がギャング、チャム、ピアの順で変化すること、小学校高学年ではギャング・グループが中心で、中学生では主にチャム・グループ、その後高校生ではピア・グループが中心となることを実証している。しかし、齋藤は「チャム」を同じ話題を一緒にするなどの行動面の有無から捉えようとしており、同一言語の使用による一体感や「一体感を確認したい」という気持ちや動機を捉えていない。

一方、黒沢ら(2003)は、「ギャング・チャム」「ピア・プレッシャー」「ピア」の3因子からなる尺度を開発している。ここでは先述の3因子でなく、「ギャング」と「チャム」の項目が混じり合った因子が抽出された。そのことから「ギャング」と「チャム」は、分離・独立して認知されていない可能性が示唆された。しかし、「ギャング・チャム」因子と「ピア」因子は集団の特性を表す因子であるのに対して、「ピア・プレッシャー」因子は仲間関係の弊害を表す因子であることから、仲間関係の発達の定義からすれば次元が違うものであると考えられる。これらのことから、黒沢ら(2003)の尺度もまた、保坂・岡村の仲間関係の発達の仮説を正確に表している尺度と

は言い難い。そこで、これらの尺度を参考にしつつ、仲間関係の発達の変説をより正確に反映した尺度を新たに作成する。

第2の目的は、作成した尺度を用い、仲間関係の発達と友人および親などとの関係を検討し、「ギャング」「チャム」「ピア」のそれぞれの違いについて明らかにすることである。仲間関係の発達の変説を実証している研究自体は少ないものの、この変説を用いて検討している青年期の仲間関係に関する研究がいくつかある。

榎本(1999)は、青年期の友人関係を友人との「活動的側面」と友人に対する「感情的側面」の2側面から捉え、友人関係の発達のな変化を明らかにしている。そのなかで、「親密確認活動」は主に「不安・懸念」と、「相互理解活動」は「独立」と関連があり、また、どの活動的側面も「信頼・安定」と関連があった。考察の中で、「相互理解活動」は保坂・岡村(1986)の「ピア・グループ」に、「親密確認活動」は「チャム・グループ」に、「共有活動」は「ギャング・グループ」に相当すると思われると述べている。このことから、「チャム」には「信頼・安定」および「不安・懸念」が関連していることが予想される。また、「ピア」には「信頼・安定」および「独立」が関連していることが予想される。なお、榎本(1999)の結果には表れていないが、「共有活動」に相当する「ギャング・グループ」は、外面的な同一行動による一体感を特徴としていることから、内面を共有したいという「チャム・グループ」とは違い、友人との関わりにおいてある程度の「独立」を保つことができると考える。そこで、「ピア」と同様に「ギャング」も「独立」が結びついていることが予想される。

また、石本ら(2009)は友人関係のあり方を心理的距離と同調性の2側面から捉え、その友人関係スタイルを仲間関係の発達の変説と重ね合わせている。そのなかで、心理的距離が近く同調性も高い「密着群」は「チャム・グループ」にあたり、心理的距離が近くとも同調性は低い「尊重群」は「ピア・グループ」にあたりと考えられると述べている。この2側面から友人関係を捉える研究は、上野ら(1994)が初めて行っている。上野ら(1994)は、同調性が高いことは仲間集団への密着性を示すものと考えられると述べている。また、石本(2011)によると、同調性は中学生が高校生よりも高かったことを示している。これらのことから、「ギャング」と「チャム」には「同調性」が関連するものの、「ピア」には「同調性」は関連しないと予想される。

さらに、「ギャング」「チャム」「ピア」の出現の順序とその時期を検討する必要がある。青年期は親から心理的に離れ、自立して個を確立していく時期であることから、「親からの心理的分離」を発達の指標とすることを考えた。福島(1992)は、親子関係の発達のプロセスを検討する中で、「親からの心理的分離」は中学から高校(女子は大学)で上昇傾向を示し、高校段階において成人レベルに達することを明らかにしている。また、中学から高校にかけて親からの独立欲求が高まり、親と自分を離して考えるようになり、親も自分も一人の人間だという意識的自覚がなされるようになると考察している。このことから、仲間関係の発達の最終段階である「ピア」には「親からの心理的分離」が関連すると予想される。

以上のことを整理し、「ギャング」「チャム」「ピア」について次の変説を立てた。

変説1: 「ギャング」は、友人に対する「信頼・安定」および「独立」の感情と結びつきやすく、「同調性」も高まる。

変説2: 「チャム」は、友人に対する「信頼・安定」および「不安・懸念」の感情と結びつきやすく、「同調性」も高まる。特に中学生女子においてその特徴があらわれる。

仮説3: 「ピア」は、友人に対する「信頼・安定」および「独立」の感情と結びつきやすく、「同調性」とは関連しない。「親からの心理的分離」の高まりと関連がある。高校生においてその特徴があらわれる。

このように「ギャング」「チャム」「ピア」の特徴を捉えた上で、さらに、対象者を学校種および性別ごとに分けて分析する。それぞれの学校種および性別による「ギャング」「チャム」「ピア」の特徴を明らかにすることにより、仲間関係の位相がどのように発達の変化を遂げるのかを検討できるであろう。

他方、黒沢ら(2005)は、仲間関係の発達について「ギャング・グループ」から「チャム・グループ」さらには「ピア・グループ」と段階的に変化・移行していくのではなく、これらの特性を併せ持ちながら徐々にその割合が変化していくと考察している。そこで、「ギャング」「チャム」「ピア」が併存するものであるのか、または独立するものであるのか、それらが発達段階によってどのように変化していくのかについても検討する余地があると考ええる。実際の生活場面においては、中学生および高校生は「ギャング」「チャム」「ピア」を組み合わせて使っている可能性が高い。そこで、第3の目的として、個人内の「ギャング」「チャム」「ピア」の組み合わせのパターンごとに、友人に対する感情および同調性、親からの心理的分離がどのように影響しているのかを明らかにする。また、学校種・性別ごとに個人内の「ギャング」「チャム」「ピア」の組み合わせのパターンにより、「ギャング」「チャム」「ピア」は置き換わっていくのか、併存するものなのかを検討する。また、学校種および性別による違いや仲間関係の発達に関する知見も得ることを目指す。

II. 研究1 仲間関係の発達についての尺度の作成と信頼性の検討

1. 目的

保坂・岡村(1986)のギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループの概念にもとづき、仲間関係の発達についての尺度を作成し、その信頼性を検討する。具体的には、中島・関山(2016)の「仲間関係位相尺度」の改良を図ることとした。

2. 方法

(1) 被調査者

鹿兒島県の公立中学校2校の1, 2年生(男子176名, 女子195名), 公立高等学校2校の1, 2年生(男子256名, 女子212名)の計839名を対象とした。

(2) 質問紙の構成

①フェイス・シート

学年、性別を尋ねた。結果は数値として処理し、個人の回答を問題にしたり、そのまま公表することはないことを明記し、不安が軽減するよう配慮した。

②仲間関係位相尺度

保坂・岡村の仲間関係の発達の仮説にもとづいて、これまでに作成された齋藤(1986)の「友だちづきあいについての21項目」と、黒沢ら(2003)の「仲間関係発達尺度」を参考に原案を作成した。中島・関山(2016)の「仲間関係位相尺度」の15項目を土台にして、それぞれの因子にあたる項目を増やし原案とした。原案は、24項目(ギャング項目8項目, チャム8項目, ピア8項目)であった。同性の親しい友だちとの関係について、どの程度あ

てはまるかを尋ねるものである。「非常によくあてはまる」「ややあてはある」「どちらともいえない」「あまりあてはならない」「全くあてはまらない」の5段階評定で、回答をそれぞれ5点、4点、3点、2点、1点と得点化した。

3. 手続き

調査は、2016年2月～3月に実施した。回答はすべて無記名式である。学級担任が、学級活動の時間に調査用紙を配布し、記入を求め回収した。

4. 結果と考察

仲間関係位相尺度原案24項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量が.35未満の項目および、複数の因子にまたがって因子負荷量が.35以上の項目を削除した。その結果、解釈可能な3因子を抽出し、第1因子を「チャム」、第2因子を「ピア」、第3因子を「ギャング」と命名し、これら16項目を「仲間関係位相尺度」とした。各下位尺度の項目および因子分析の結果は、表1のとおりである。

次に、表2に各下位尺度の平均点、標準偏差、 α 係数および下位尺度間の相関を示した。相関係数についてとりあげると、チャムとピアの間で中程度の正の相関が、ギャングとチャムの間および、ギャングとピアの間で弱い正の相関が認められた。チャムとピア、チャムとギャングの相関が特に高かった点については、仮説にもとづくと、チャムとギャングおよび、チャムとピアは発達段階が近接していることから、このような結果になったと考えられる。また、 α 係数は、項目数の少なさを考慮すれば低い値とは言えず、仲間関係位相尺度には一応の信頼性が保たれていると判断した。

表1 仲間関係位相尺度の項目と因子構造

項目内容	I	II	III
I. チャム			
友達のことを誰よりも知っていたい	.699		
仲の良い友達と同じ持ち物を持っていたらうれしい	.603		
友達と意見や考えが一緒だとほっとする	.582		
友達とは、お互いの気持ちを確かめ合うことが大切だ	.540		
友達とのメールや手紙のやりとりで、友達の気持ちを知りたい	.533		
他の友達と自分が仲良くなったら、今の友達に悪いと思う	.484		
友達と趣味や好みが一緒だともっと仲良くなれる気がする	.453		
II. ピア			
友達とは、考え方の違いがあっても本音で話せる		.663	
友達だからお互いの意見をきちんと言い合える		.618	
他のグループの人たちとも、自然とつき合える		.602	
自分とは違う性格の友達ともつき合ってみたい		.486	
違う考えを持つ友達とも知り合いたい		.485	
III. ギャング			
追いかれたり、たたき合ったりして、ふざけ合うのが楽しい			.713
一緒にいたずらをするのがおもしろい			.708
友達とは悩みを語り合うより、わいわい騒ぐ方が多い			.500
友達がおもしろがっていることは自分もやりたくなる			.466

$n=839$

表2 仲間関係位相尺度の下位尺度の平均値(M), 標準偏差(SD), α 係数(α)および下位尺度間相関係数

下位尺度	M	SD	α	(n = 839)	
				(2)	(3)
チャム (1)	23.97	4.81	.76	.36	.34
ピア (2)	19.17	3.34	.70	-	.29
ギャング (3)	14.26	3.24	.71	-	-

Ⅲ. 研究2 仲間関係の発達と友人および親との関係の検討

1. 目的

中学生および高校生を対象に、仲間関係のあり方と、友人および親との関係を明らかにする。あわせて、研究1で作成した仲間関係位相尺度の妥当性の検証を行う。

2. 方法

(1) 被調査者

鹿兒島県の公立中学校2校の1, 2年生(男子176名, 女子195名), 公立高等学校2校の1, 2年生(男子256名, 女子212名)の計839名を分析の対象とした。

(2) 質問紙の構成

①フェイス・シート

学年, 性別を尋ねた。結果は数値として処理し, 個人の回答を問題にしたり, そのまま公表することはないことを明記し, 不安が軽減するよう配慮した。

②仲間関係位相尺度

研究1で作成した尺度16項目(ギャング4項目, チャム7項目, ピア5項目)を用いた。本尺度は, 同性の親しい友だちとの関係について, どの程度あてはまるかを尋ねるものである。「非常によくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5段階評定で, 回答をそれぞれ5点, 4点, 3点, 2点, 1点と得点化した。

③友人に対する感情尺度

榎本(1999)の友人に対する感情の質問紙25項目のうち, 下位尺度の「ライバル意識」以外の「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」「葛藤」の21項目を選んだ。本来は22項目あったが, 「不安・懸念」の1項目は実施の際に不備があり, 使用できなかった。本尺度は同性の親しい友だちとの関係について, どの程度あてはまるかを尋ねるものである。「とてもよく思う」「よく思う」「どちらかと言えば思う」「どちらかと言えば思わない」「あまり思わない」「まったく思わない」の6段階評定で, 回答をそれぞれ6点, 5点, 4点, 3点, 2点, 1点と得点化した。下位尺度の「信頼・安定」は, 友人を信頼し, かつ友人との間で安定感を保った肯定的な感情を中心として抱いていること, 「不安・懸念」は, 友人との関係を意識するがゆえに友人に対して不安を感じていること, 「独立」は, 友人と一緒にいるときも自分を確立していること, 「葛藤」は, 友人との間で自分が確立していないことを示す。

④同調性尺度

上野ら(1994)による「交友関係に関する項目」の中の「友人への同調に関する項目」4項目を選んだ。本来の尺度の評定は「○」か「×」かの2件法になっているが、どの程度あてはまるかを尋ねるために「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4段階評定とし、回答をそれぞれ4点、3点、2点、1点と得点化した。

⑤親からの心理的分離尺度

福島(1992)による「心理的自立尺度」から、下位尺度の「親からの心理的分離」5項目を選んだ。「親からの心理的分離」は、親は自分と異なる一人の人間であることを認めていこうとすることを表す項目である。評定については記載されていなかったため、「非常によくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5段階評定とし、回答をそれぞれ5点、4点、3点、2点、1点と得点化した。

⑥社会的望ましき尺度

谷(2008)による「バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版(BIDR-J)」から下位尺度の「自己欺瞞」「印象操作」の項目から因子負荷量の高いものから2項目ずつ選んだ。本尺度は、世間の目や社会的常識に対する態度をとらえるために用いる。「非常によくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5段階評定で、回答をそれぞれ5点、4点、3点、2点、1点と得点化した。

3. 手続き

調査は、2016年2月～3月に実施した。回答はすべて無記名式である。学級担任が、学級活動の時間に調査用紙を配布し、記入を求め回収した。

4. 結果と考察

(1) 記述統計

仲間関係位相尺度と友人に対する感情尺度については下位尺度得点、同調性尺度、親からの心理的分離尺度、社会的望ましき尺度については、合計点を算出した。また、各下位尺度および尺度間の相関を確認した。表3に平均値、標準偏差および相関係数を示した。まず、友人に対する感情の「信頼・安定」は、「チャム」および「ピア」との間で中程度の正の相関が認められた。また、「ギャング」との間では、弱い正の相関が認められた。このことから「ギャング」よりも「チャム」および「ピア」のほうが、友人に対する「信頼・安定」の感情は高いと考えられる。「不安・懸念」については、「チャム」との間に中程度の正の相関が認められ、「チャム」は友人に対する「不安・懸念」と関連があることが分かる。「独立」については、「ピア」との間に中程度の正の相関、「ギャング」とは弱い正の相関が認められた。このことから、「ギャング」と「ピア」は「独立」の感情と関連があり、さらに、「ギャング」よりも「ピア」のほうが、「独立」の感情と関連が高いことがうかがえる。「葛藤」については、「ピア」との間に弱い負の相関が認められ、「ピア」は、友人に対する「葛藤」の少なさと関連があることが分かる。

**表3 仲間関係位相尺度の下位尺度、友人に対する感情、同調性、親からの心理的分離、社会的望ましさの
平均値 (M)、標準偏差 (SD) および相関係数**
(n = 839)

尺度		M	SD	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
仲間関係位相	チャム (1)	23.97	4.81	.36	.34	.51	.40	.11	.17	.56	.02	.01
	ピア (2)	19.17	3.34	—	.29	.58	-.12	.55	-.24	.23	.15	.20
	ギャング (3)	14.26	3.24	—	—	.33	.03	.21	-.05	.35	.09	-.08
友人に対する感情	信頼・安定 (4)	33.14	7.02	—	—	—	-.12	.49	-.25	.43	.00	.25
	不安・懸念 (5)	17.30	6.70	—	—	—	—	-.25	.70	.29	.01	-.24
	独立 (6)	13.14	2.83	—	—	—	—	—	-.30	.03	.24	.23
	葛藤 (7)	10.73	4.09	—	—	—	—	—	—	.08	.04	-.20
同調性	(8)	11.77	2.76	—	—	—	—	—	—	—	-.05	-.03
親からの心理的分離	(9)	20.70	2.78	—	—	—	—	—	—	—	—	-.09
社会的望ましさ	(10)	12.03	2.41	—	—	—	—	—	—	—	—	—

「同調性」との関連については、「ギャング」および「チャム」との間に中程度の正の相関、「ピア」との間に弱い正の相関が認められた。このことから、3つの位相はすべて「同調性」とある程度の関連があるものの、「チャム」が最も同調性との関連が高いといえる。「親からの心理的分離」は、それぞれの仲間関係位相との相関は特に認められなかった。「社会的望ましさ」は、「ピア」との間に弱い正の相関が認められたことから、「ピア」は社会的望ましさと関連している可能性があることが推測される。

なお、友人に対する感情の下位尺度間の相関をみると、「信頼・安定」と「独立」との間に中程度の正の相関が認められ、「独立」は「信頼・安定」を土台にして持つ感情であることがうかがえる。また、「信頼・安定」と「葛藤」との間には中程度の負の相関が認められたことから、「信頼・安定」は「葛藤」の少なさと関連があるといえる。また、「不安・懸念」と「葛藤」との間で強い正の相関が認められ、友人に対する「不安・懸念」と「葛藤」は強く関連していることが分かる。さらに「不安・懸念」は、「独立」との間で中程度の負の相関が認められ、友人に対する「不安・懸念」は、「独立」の感情を持ちにくいことと関連していることが推測される。また、「葛藤」も「独立」とも中程度の負の相関が認められたことから、「葛藤」も「独立」の感情を持ちにくいことと関連していると推測される。これらの結果から、「信頼・安定」および「独立」はポジティブな感情であり、「不安・懸念」および「葛藤」はネガティブな感情であると解釈できよう。

「同調性」と友人に対する感情の下位尺度間の相関では、「信頼・安定」との間および「不安・懸念」との間で中程度の正の相関が認められた。このことから、「同調性」は「信頼・安定」および「不安・懸念」の感情が関連していることが分かる。「親からの心理的分離」は、「独立」との間で弱い正の相関が認められたことから、「親からの心理的分離」は、友人からの「独立」と関連していることが分かった。「社会的望ましさ」は「信頼・安定」との間で中程度の正の相関、「独立」との間で弱い正の相関が認められた。また、「不安・懸念」との間および「葛藤」との間で弱い負の相関が認められ、「社会的望ましさ」は、友人に対するポジティブな感情と正の関連があり、ネガティブな感情と負の関連があることが分かった。

(2) 分析1

仲間関係の各位相に友人および親などからの影響がどのように作用しているかを検討するため、仲間関係位相尺度の「ギャング」「チャム」「ピア」の合計得点を目的変数とし、友人に対する感情の4因子と、同調性、親から

の心理的分離，社会的望ましさを説明変数とする重回帰分析を行った。分散分析により，重回帰式の適合度を確認したところ，全ての場合において有意性が認められた ($F(7, 831) = 29.6, p < .001$; $F(7, 831) = 129.2, p < .001$; $F(7, 831) = 90.09, p < .001$)。その結果を表4に示した。

ギャングは，「信頼・安定」および「独立」から正の影響があった。また，「同調性」から正の影響もあった。このことから，ギャングは，同調しながらも個人としての主張や行動がある程度は保たれていることがうかがえる。また，「社会的望ましさ」から負の影響もあった。本研究の被調査者は中学生と高校生であり，理論的にはギャング・グループの最盛期とされる小学校高学年の時期を過ぎている者たちである。そのように考えるとこの結果は，社会的望ましさへの意識の低さや，大人への反発性を意味しているのかもしれない。

チャムは，「信頼・安定」および「不安・懸念」から正の影響があった。チャムは，各位相のうちも「信頼・安定」が高かった。友人へ高い信頼感を寄せ安定感を持ちつつも，その友人関係への過剰な意識のためか，同時に「不安・懸念」の影響を受けてしまうと考えられる。また，「同調性」から正の影響もあった。このことから，この時期では「信頼・安定」と「不安・懸念」という両極の感情がせめぎ合っており，それらがともに強固な同調性に関連していると推察される。

ピアは，「信頼・安定」および「独立」から正の影響があった。このことは，信頼感・安定感を持ちつつ，個人として主張や行動ができていることを示している。「葛藤」から負の影響があったことから，友人との葛藤をあまり感じずに過ごしていることがうかがえる。また，ピアのみ「親からの心理的分離」から正の影響があったことから，この時期は，親からも心理的に自立した段階であるといえる。友人との感情および同調性の結果と関連づけて考えると，親からも友人からも心理的に自立していると解釈できる。

仲間関係のいずれの位相も「信頼・安定」から正の影響があった。「信頼・安定」は，友人を信頼し，かつ友人との間で安定感を保った肯定的な感情を抱いていることを表す因子である（榎本，1999）。友人関係の基盤となる「信頼・安定」がどの位相でも関連していることは，当然のことであるといえよう。

以上の結果を踏まえて，先行研究をもとに立てた仮説の検証をおこなっていく。ギャングについては，“友人に対する「信頼・安定」および「独立」の感情と結びつきやすく，「同調性」も高まる”という仮説1が支持された。チャムについては，“友人に対する「信頼・安定」および「不安・懸念」の感情と結びつきやすく，「同調性」

表4 仲間関係位相尺度の各因子を目的変数とした重回帰分析

($n = 839$)

説明変数	標準偏回帰係数 (β)		
	ギャング	チャム	ピア
友人に対する感情			
信頼・安定	.169***	.460***	.378***
不安・懸念	-.028	.383***	.051
独立	.131**	-.038	.322***
葛藤	-.004	-.012	-.077*
同調性	.285***	.252***	.055
親からの心理的分離	.061	.040	.086**
社会的望ましさ	-.141**	.003	.043
R^2	.20	.52	.44

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

も高まる”という仮説2の一部も支持された。また、ピアについても、“友人に対する「信頼・安定」および「独立」の感情と結びつきやすく、「同調性」とは関連しない。「親からの心理的分離」の高まりと関連がある。”という仮説3の一部が支持された。

次に、それぞれの学校種・性別による違いを明らかにするために、対象者を学校種・性別ごとに分け、仲間関係の各位相に友人および親などからの影響がどのように作用しているかを検討した。「ギャング」「チャム」「ピア」の合計得点を目的変数とし、友人に対する感情の4因子と同調性、親からの心理的分離、社会的望ましさを説明変数とし、重回帰分析を行った。分散分析により、重回帰式の適合度を確認したところ、全ての場合において有意性が認められた ($F(7, 168) = 7.7, p < .001$; $F(7, 187) = 10.3, p < .001$; $F(7, 248) = 7.6, p < .001$; $F(7, 204) = 10.8, p < .001$; $F(7, 168) = 26.2, p < .001$; $F(7, 187) = 38.6, p < .001$; $F(7, 248) = 32.2, p < .001$; $F(7, 204) = 30.1, p < .001$; $F(7, 168) = 24.5, p < .001$; $F(7, 187) = 22.7, p < .001$; $F(7, 248) = 26.4, p < .001$; $F(7, 204) = 25.0, p < .001$)。各位相の重回帰分析の結果は表5、表6、表7に示した。

今回の調査の対象である中学生と高校生は、先行研究より「チャム」および「ピア」の発達段階にあると予想されるため、「チャム」および「ピア」の結果から述べることにする。まず、「チャム」について学校種・性別ごとの結果を読み取り、比較していく。「チャム」では、どの学校種・性別においても「信頼・安定」「不安・懸念」「同調性」の正の影響があった(表6を参照)。「信頼・安定」と「不安・懸念」の影響性を比較すると、中学生男子・女子および高校生男子では、「信頼・安定」のほうが「不安・懸念」よりも強く影響していた。このことから、「信頼・安定」が土台にありながら「不安・懸念」も持ち合わせていることがうかがえる。しかし、高校生女子は「不安・懸念」のほうが「信頼・安定」よりも高い値を示していることから、「信頼・安定」を基調にしつつも「不安・懸念」と拮抗していることがうかがえる。これらの結果より、中学生においてチャムの特徴が最もあらわれており、そのなかでも、中学生女子において、その特徴が顕著にあらわれていると言える。中学生は「チャム」の最盛期にあり、中学生の友人に対する「信頼・安定」の感情は頂点に達し、高校生になると、その「信頼・安定」は減少するとともに「不安・懸念」の感情が高まると考えられる。これは、中学生においては「チャム」は「信頼・安定」というポジティブな感情が前面にあるが、高校生になるとそれは次第に色あせていき、「不安・懸念」というネガティブな感情が代わりに浮かび上がってくることを示しているのではないだろうか。それはつまり、「チ

表5 ギャングを目的変数とした重回帰分析 (n = 839)

説明変数	標準偏回帰係数 (β)			
	中学生男子	中学生女子	高校生男子	高校生女子
友人に対する感情				
信頼・安定	.287**	.036	.247**	.194*
不安・懸念	.168	-.002	.014	-.122
独立	.162*	.263**	.071	.042
葛藤	-.151	.036	-.049	.015
同調性	.106	.438***	.170*	.404***
親からの心理的分離	.085	.062	.065	-.039
社会的望ましさ	-.137	-.085	-.141*	-.201**
R^2	.24	.28	.18	.27

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

表6 チャムを目的変数とした重回帰分析 (n = 839)

説明変数	標準偏回帰係数 (β)			
	中学生男子	中学生女子	高校生男子	高校生女子
友人に対する感情				
信頼・安定	.528***	.512***	.434***	.358***
不安・懸念	.283**	.280***	.360***	.387***
独立	-.041	.000	.006	-.087
葛藤	-.001	-.005	.088	-.012
同調性	.225**	.322***	.196***	.321***
親からの心理的分離	.082	.019	.019	.036
社会的望ましさ	.006	.000	-.049	.013
R^2	.52	.47	.48	.51

: $p < .01$ *: $p < .001$

表7 ピアを目的変数とした重回帰分析 (n = 839)

説明変数	標準偏回帰係数 (β)			
	中学生男子	中学生女子	高校生男子	高校生女子
友人に対する感情				
信頼・安定	.361***	.451***	.270***	.380***
不安・懸念	.184*	-.124	.144	.047
独立	.387***	.240**	.322***	.384***
葛藤	-.240**	.113	-.202**	-.052
同調性	.040	.039	.096	.030
親からの心理的分離	.099	.057	.086	.114*
社会的望ましさ	-.049	.122*	.063	.042
R^2	.51	.43	.43	.46

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

チャム」が勢いを失い「ピア」へと移行していく様子をとらえた可能性がある。

また、「同調性」との関連については、女子は男子よりも「チャム」に「同調性」が強く影響していることがわかった。また、中学生女子と高校生女子において、「同調性」の影響力はあまり変化が見られず、高校生段階になっても女子は「同調性」の影響力が保たれているといえる。このことは、チャム・グループが女子においてよく見られることに通じるものであろう。

次に、「ピア」についてとりあげていく。「ピア」は、それぞれの学校種・性別において結果に違いがあった。「信頼・安定」と「独立」の影響性を比較すると、中学生女子のみが「独立」よりも「信頼・安定」のほうが強く影響していた。また、中学生女子において「社会的望ましさ」の影響が見られたことから、「ピア」を社会的に望ましいことと判断して回答していることが示された。その背景としては、おそらく中学生女子は「チャム」の最盛期にあることから、「チャム」への閉塞感や先の発達段階にある「ピア」への憧れが関連しているのではないかと考えられる。これらのことから、中学生女子の「ピア」は「チャム」の要素を残しており、本格的な「ピア」には至っていないと考えられる。一方、高校生女子では「ピア」は「親からの心理的分離」から正の影響があることから、高校生女子は親からの心理的分離がなされていることが分かった。また、中学生女子と高校生女子を比較すると、高校生女子のほうが「独立」が高く、「ピア」には「独立」の影響力が高まっていることが分かる。高校生女

子は「親からの心理的分離」も相まって、「信頼・安定」と「独立」が同程度に関連していることから、個人として確立しつつあることが推察される。また、これらのことから、高校生女子が最も「ピア」を体現していると解釈できよう。

最後に、「ギャング」についてとりあげる。「ギャング」は、理論的には小学校中学年から高学年であらわれやすいと仮定されているため、「チャム」や「ピア」と比較すると本研究で得られたデータには、あてはまりは良くないと予想される。このことが、重決定係数 (R^2) の低さに関与した可能性がある。調査対象者に小学生が含まれていれば、より顕著にギャングの特徴があらわれたのかもしれない。仲間関係位相の「ギャング」の因子の重回帰分析の結果(表4を参照)と照らし合わせると、中学生男子においてギャングの傾向があらわれていると言えよう。

「ギャング」も「ピア」と同様、それぞれの学校種・性別により影響する説明変数に違いがあった。男子は、中学生・高校生ともに「信頼・安定」が影響していた。また、中学生では「独立」が影響していたが、高校生では「独立」から正の影響はなく「同調性」が影響していた。また、女子は男子よりも高い「同調性」の影響力があつた。また、高校生男子・女子においては、「社会的望ましさ」から負の影響力があつた。これは、先述したことと同様に、常識的なことに対する意識の低さや反発性を示しているのではないかと考えられる。

「チャム」および「ピア」については、両者の違いが明確に結果として表れた。「チャム」は、どの学校種・性別においても「信頼・安定」「不安・懸念」「同調性」が影響していた(表6を参照)が、「ピア」は、どの学校種・性別においても「信頼・安定」「独立」が影響していた(表7を参照)。このことから、両者は「信頼・安定」を土台にしつつも、「チャム」では「同調性」を持ちながら「不安・懸念」も持っており、「ピア」では「独立」を保っているということが明らかになった。また、「ピア」は「同調性」との関連は認められなかった。これらのことから、「チャム」から「ピア」への移行においては、友人への「同調性」が減少していくとともに、友人から「独立」する感情が増加していくことが関係していると言えよう。

この分析により、チャムについての“特に中学生女子においてその特徴があらわれる”という仮説2が支持された。また、ピアについての“高校生においてその特徴があらわれる”という仮説3に関しては、女子において支持された。

(3) 分析2

友人関係の実際の場面では、「ギャング」「チャム」「ピア」を組み合わせさせて使っている可能性があるため、個人内のそれらの組み合わせのパターンによって、友人および親などからの影響がどのように作用しているかを検討する。対象者を学校種および性別ごとに分け、各因子の項目の合計得点を算出し、「ギャング」得点、「チャム」得点、「ピア」得点とし、それらを標準化した値を用いてクラスタ分析を行い、学校種および性別ごとに、それぞれ4つのクラスタを抽出した(図1～図4を参照)。また、その学校種および性別ごとのクラスタ分析による多重比較の結果を表8～表11に示した。

中学生男子においては、CL②およびCL④は他の2つのクラスタと比較し、「信頼・安定」および「独立」が高いことから、友人関係を快適に過ごしていると考えられる。「不安・懸念」で比較すると、CL②は「不安・懸念」がCL④よりも低いことから、CL②の者は気楽にやれているとも捉えられる。一方、「不安・懸念」が高いCL④は、友人に対して「信頼・安定」の感情と、友人を意識することからくる「不安・懸念」という相反する感情がともに高

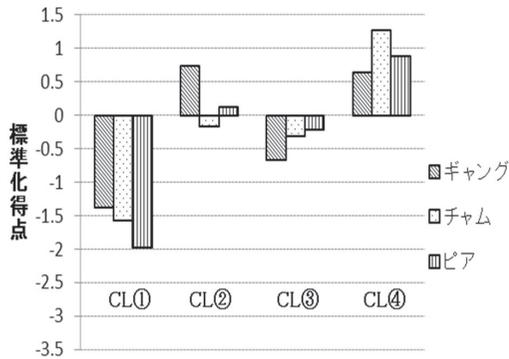


図1 中学生男子のクラスタ

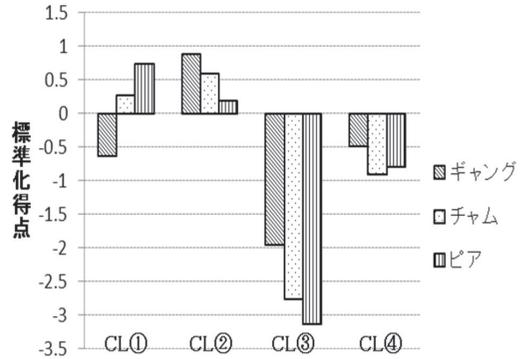


図2 中学生女子のクラスタ

いことから、CL④の者は、より思春期らしい心性を持っていると考えられる。

中学生女子においては、CL①およびCL②は、他の2つのクラスタと比較し、「信頼・安定」および「独立」が高いことから、友人関係を快適に過ごしていると考えられる。「同調性」については、CL①よりもCL②のほうが高いことから、CL②はチャムの要素が大きく、CL①はピアの要素が大きく作用していると考えられる。CL①については「社会的望ましさ」の高さが関係しており、「ピア」への憧れのようなものが反映しているのかもしれない。

表8 中学生男子のクラスタ間の比較

(n=176)

	CL① (n=14)	CL② (n=52)	CL③ (n=69)	CL④ (n=41)	F	多重比較 (Bonferroni)
友人に対する感情						
信頼・安定	22.29 (8.70)	35.13 (6.46)	31.90 (7.14)	40.41 (5.32)	29.61***	CL① < CL②, CL③, CL④*** CL③ < CL②† CL③ < CL④*** CL② < CL④**
不安・懸念	13.00 (6.71)	13.50 (5.75)	15.61 (5.93)	17.68 (8.02)	3.82*	CL② < CL④*
独立	11.36 (3.84)	14.02 (2.91)	12.39 (2.42)	14.93 (2.67)	10.74***	CL①, CL③ < CL②** CL①, CL③ < CL④***
葛藤	11.86 (5.04)	8.94 (4.39)	10.25 (4.06)	10.68 (5.67)	1.98	n. s.
同調性	8.14 (3.21)	12.46 (2.16)	11.41 (2.60)	13.63 (2.34)	19.34***	CL① < CL②, CL③, CL④*** CL③ < CL④***
親からの 心理的分離	21.14 (3.35)	20.31 (3.16)	19.84 (2.98)	21.46 (2.83)	2.74*	CL③ < CL④*
社会的望ましさ	11.86 (3.72)	12.35 (2.36)	12.48 (2.55)	12.54 (2.46)	0.27	n. s.

†: p < .10 * : p < .05 ** : p < .01 *** : p < .001

不安・懸念 : Tamhane

表9 中学生女子のクラスタ間の比較

(n=195)

	CL① (n=55)	CL② (n=78)	CL③ (n=3)	CL④ (n=59)	F	多重比較 (Bonferroni)
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)		
友人に対する感情						
信頼・安定	37.58 (5.27)	37.38 (5.49)	11.67 (4.04)	29.39 (5.72)	45.19***	CL③ < CL④, CL①, CL②*** CL④ < CL①, CL②***
不安・懸念	17.67 (6.87)	20.21 (7.06)	8.67 (2.52)	18.83 (6.62)	3.78*	CL③ < CL②* CL③ < CL④†
独立	13.85 (2.72)	13.51 (2.83)	7.33 (5.13)	11.86 (3.22)	8.86***	CL③ < CL①, CL②** CL③ < CL④† CL④ < CL①, CL②**
葛藤	10.09 (4.05)	11.42 (4.58)	7.00 (2.00)	11.56 (4.45)	2.20†	n. s.
同調性	12.27 (2.79)	13.79 (1.80)	4.33 (0.58)	10.81 (2.85)	27.57***	CL③ < CL①, CL②, CL④*** CL④ < CL①** CL④ < CL②*** CL① < CL②**
親からの						
心理的分離	20.8 (2.43)	20.29 (2.80)	18.33 (5.51)	19.53 (3.10)	2.38†	n. s.
社会的望ましさ	12.98 (2.20)	12.29 (2.49)	9.67 (1.53)	11.53 (2.55)	4.58**	CL④ < CL①**

†: p < .10 * : p < .05 ** : p < .01 *** : p < .001

高校生男子においては、CL①およびCL②は「信頼・安定」および「独立」がある程度高く、友人関係を快適に過ごせていると考えられる。CL①は「ピア」のみが0以上であり、CL②は「ギャング」のみが0以上のクラスタである。有意傾向ではあるが、CL②はCL①よりも「社会的望ましさ」が低いことから、CL②は常識的なことに対する意識の低さと大人への反発性が関係しているのかもしれない。

高校生女子においては、CL②およびCL③は「信頼・安定」「独立」が高く、友人関係を快適に過ごせていると考えられる。しかし、「不安・懸念」についてはCL③のほうがCL②よりも高い。また、「同調性」についてもCL③

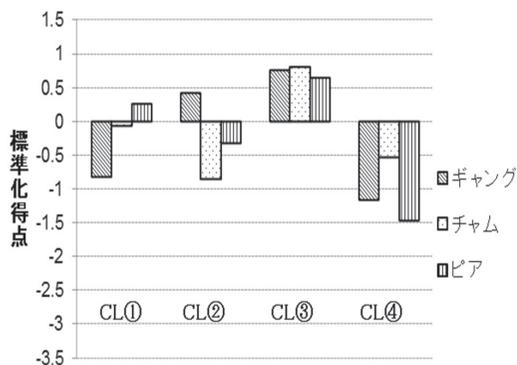


図3 高校生男子のクラスタ

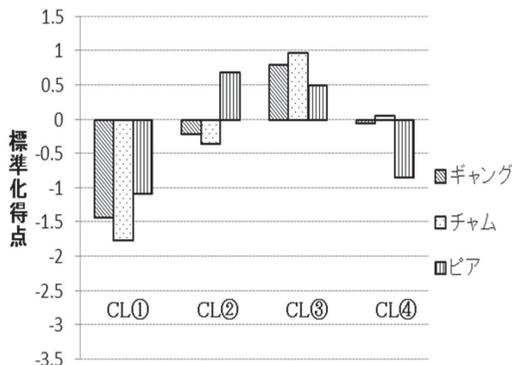


図4 高校生女子のクラスタ

表10 高校生男子のクラス間比較

(*n*=257)

	CL① (<i>n</i> = 62)	CL② (<i>n</i> = 60)	CL③ (<i>n</i> = 94)	CL④ (<i>n</i> = 40)		多重比較 (Bonferroni)
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>F</i>				
友人に対する感情						
信頼・安定	32.89 (4.55)	29.97 (5.00)	35.96 (4.69)	25.93 (5.00)	47.13***	CL④ < CL①, CL②, CL③*** CL② < CL①** CL① < CL③** CL② < CL③***
不安・懸念	15.94 (6.00)	14.53 (5.59)	17.85 (7.02)	17.52 (6.17)	3.86*	CL② < CL③**
独立	13.34 (2.22)	12.67 (2.23)	13.99 (2.19)	10.83 (2.25)	20.04***	CL④ < CL②, CL①, CL③*** CL② < CL③**
葛藤	9.95 (3.15)	10.00 (2.69)	10.97 (4.67)	12.73 (2.86)	5.80**	CL①, CL② < CL④*** CL③ < CL④†
同調性	11.55 (2.34)	10.68 (2.79)	12.62 (2.30)	10.38 (2.42)	11.52***	CL②, CL④ < CL③*** CL① < CL③*
親からの 心理的分離	20.63 (2.56)	20.87 (2.67)	21.37 (2.54)	20.10 (3.01)	2.42†	CL④ < CL③†
社会的望ましさ	12.29 (2.12)	11.22 (2.31)	11.95 (2.21)	11.60 (2.47)	2.56†	CL② < CL①†

†: *p* < .10 * : *p* < .05 ** : *p* < .01 *** : *p* < .001
葛藤 : Tamhane

表11 高校生女子のクラス間比較

(*n*=212)

	CL① (<i>n</i> = 22)	CL② (<i>n</i> = 67)	CL③ (<i>n</i> = 61)	CL④ (<i>n</i> = 62)		多重比較 (Bonferroni)
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>F</i>				
友人に対する感情						
信頼・安定	24.09 (7.92)	34.37 (4.61)	35.68 (5.11)	29.02 (5.50)	35.34***	CL① < CL②, CL③*** CL④ < CL②, CL③*** CL① < CL④†
不安・懸念	14.14 (5.51)	16.12 (5.40)	19.65 (5.95)	21.14 (6.10)	13.11***	CL①, CL② < CL③** CL①, CL② < CL④***
独立	13.23 (3.02)	14.46 (2.08)	13.65 (2.32)	11.33 (3.00)	17.35***	CL④ < CL①** CL④ < CL②, CL③***
葛藤	10.86 (3.12)	9.63 (3.68)	10.85 (3.53)	12.49 (2.95)	7.84***	CL② < CL④*** CL③ < CL④*
同調性	7.77 (2.58)	10.79 (2.41)	12.85 (2.09)	11.84 (2.10)	29.80***	CL① < CL②, CL④ < CL③*** CL② < CL③*** CL④ < CL③† CL② < CL④†
親からの 心理的分離	22.00 (2.23)	21.42 (2.56)	21.67 (2.31)	20.16 (2.34)	5.74**	CL④ < CL①, CL②* CL④ < CL③**
社会的望ましさ	12.41 (3.17)	12.25 (2.22)	11.73 (2.11)	11.22 (2.22)	2.71*	CL④ < CL②†

†: *p* < .10 * : *p* < .05 ** : *p* < .01 *** : *p* < .001
信頼・安定 : Tamhane

がCL②よりも高い。CL②は「ピア」のみが0以上であるため、「不安・懸念」および「同調性」の低さは「ピア」らしさを表しているといえよう。またCL④は、CL②およびCL③よりも「信頼・安定」および「独立」が低く、「葛藤」が高い。また「親からの心理的分離」が他のクラスタに比べて低い。CL④は、「ピア」のみが0よりも著しく低いクラスタであることから、CL②)に対照的なクラスタであるといえよう。

他方、どの学校種・性別においても、「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点がすべて0よりも上回っているクラスタ（中学校男子ではCL④、中学校女子ではCL②、高校生男子ではCL③、高校生女子ではCL③）があらわれ、他のクラスタに比べて「同調性」が最も高く、「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」も高かった。このことから、これらのクラスタの者は他のクラスタの者と比較し、高い「信頼・安定」の感情を持ちつつも、同時に高い「不安・懸念」を持っており、「同調性」を持ちながらも友人から「独立」している者であることを示している。このように、これらのクラスタの者は「信頼・安定」および「独立」といったポジティブな感情も持つ一方で、「不安・懸念」も高いことから、友人関係を快適に過ごしているのか判断できなかった。このクラスタの中には、「ギャング」「チャム」「ピア」の関わり方を場面に応じて使い分けながら、友人との関わりが快適に行えている者と、友人との関わりが快適ではないからこそ、さまざまな関わり方をしようとしている者が混在している可能性も考えられることから、今後はこのようなクラスタの解釈の仕方を検討していく必要がある。

また、どの学校種・性別においても、「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点が0より大きく下回っているクラスタ（中学校男子ではCL①、中学校女子ではCL③、高校生男子ではCL④、高校生女子ではCL①）があらわれ、他のクラスタに比べて最も「信頼・安定」および「同調性」が低く、「不安・懸念」および「独立」も低かった。このことから、「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点が0より大きく下回っているクラスタの者は、他のクラスタの者よりも「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」の感情および「同調性」を持つことが少ないことを示しており、友人との関わり方が全般的に乏しいことが推察される。

中学生では、「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点がすべて0から-1の間で、0を若干下回っているクラスタ（中学生男子ではCL③、中学生女子ではCL④）があった。これらのクラスタの者は、0を大きく下回っているクラスタの者よりは、「信頼・安定」「独立」「同調性」「不安・懸念」は高かったが、他の2つのクラスタよりは低かった。また、これらのクラスタの者は、「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点が0以上の2つのクラスタの者（中学生男子ではCL②とCL④、中学生女子ではCL①とCL②）と比較し「信頼・安定」「独立」「同調性」が低かった。このことから、「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点がすべて0から-1の間で、0を若干下回っているクラスタの者は、「ギャング」「チャム」「ピア」得点がすべて0を大きく下回っているクラスタの者よりは友人との関わりはあるものの、すべて0を上回っているクラスタの者と比較すると友人との関わり方が少ない者であると考えられる。

また、高校生では、男女ともに「ギャング」「チャム」「ピア」の標準化得点が0よりも若干下回っているクラスタはあらわれず、中学生と高校生ではクラスタのあらわれ方に違いがあった。なぜそのような違いがあらわれたのかは不明だが、興味深い結果である。さらに高校生では、「ピア」のみが0以上のクラスタ（男子ではCL①、女子ではCL②）があった。高校生になると「ピア」に特化したクラスタがあらわれ、中学生から高校生にかけて「チャム」から「ピア」への移行が進むことが示されたといえる。この結果から、仮説3の“ピアは、高校生においてその特徴があらわれる”は支持されたといえよう。

IV. 総合考察

研究1では、保坂・岡村（1986）のgang-group, chum-group, peer-groupの仮説にもとづき、仲間関係の発達についての尺度を作成した。また、その尺度については、一応の信頼性を確認できたと判断した。

研究2では、作成した仲間関係位相尺度を用いて、「ギャング」「チャム」「ピア」の仲間関係の各位相について、友人に対する感情、同調性、親からの心理的分離との関連から検討した。また、学校種・性別ごとの分析により、各仲間関係位相の優勢な時期について検討した。それらの結果により、3つの仮説はほぼ支持され、仲間関係の各位相の特徴および優勢な時期を明らかにすることができた。これらの結果は、これまでの先行研究において指摘されている特徴と合致していたことから、研究1で作成した仲間関係位相尺度の妥当性の検証にも寄与したと言えるだろう。また、「チャム」は、その仲間関係位相が優勢な時期において「信頼・安定」と結びついていたが、優勢な時期を過ぎると「不安・懸念」の影響が強まることが示された。

さらに、友人関係の実際の場面において、個人内の「ギャング」「チャム」「ピア」の組み合わせのパターンを抽出し、友人および親などの関係を検討した。その結果、個人が「ギャング」「チャム」「ピア」の各側面を併せ持っており、その組み合わせのパターンのあらわれ方は、個人によって多少の幅があるとはいえ、全体としては併存しつつも置き換わっていくことが示された。この分析によっても、ある仲間関係位相が優勢な時期にその関わりを持っている者は、より適応的であるが、優勢な時期を過ぎてもその関わり方にとどまっている者は、ネガティブな感情が高いことが確認できた。これらのことから、仲間関係の位相は校種と関連があり、年齢に応じた仲間関係の位相への移行が、青年期の友人関係を快適に過ごせることにつながると考えられる。

とはいえ、本研究には次の2つの課題が残されている。1つは、中学生と高校生を対象に調査を行ったため、「ギャング」の検証が不十分であったことは否めない。今後、「ギャング」についてさらなる検証を行うためには、小学校高学年頃の児童まで対象をひろげて調査を行う必要がある。もう1つは、「ギャング」「チャム」「ピア」のすべて高い者はポジティブな感情だけでなくネガティブな感情も高いことから、必ずしも快適に過ごせているとは言えない可能性が残った。今後は、このようなクラスターの者に、どのような心理的背景があるのかを他の視点も含めて検討していく必要がある。

現代の友人関係の状況について、保坂（1998）は、現代の青年の友人関係の特徴は薄められたチャム・グループであると指摘し、太田・米澤（2012）もまた、現代大学生の友人関係はチャム・グループの特徴を持っていると述べている。仲間関係は、アイデンティティを確立していく課題とも影響しあっていることが示唆されている（黒沢ら、2005）ことから、「チャム・グループの遷延化」がもたらす影響も懸念される。例えば石本（2011）は、高校生においては同調性と自己受容との間に弱い負の影響が示されており、学校段階によっては同調性が不適応につながる可能性を示唆している。本研究では、「チャム」の仲間関係位相の優勢な時期を過ぎると「不安・懸念」を伴いやすいことが示された。今後は本研究をもとに仲間関係の発達の状況と学校適応や心理的適応について検討するとともに、仲間関係の発達を手助けする取り組みについての検討が望まれる。

【付記】

本研究は、日本教育心理学会第58回大会（於サンポートホール高松）において発表した内容を大幅に加筆修正したものである。

【謝辞】

調査に協力していただいた中学校および高校の先生方と生徒の皆様、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

【引用文献】

- 五十嵐哲也・萩原久子（2009）．中学生の一学年間における不登校傾向の変化と学級適応感との関連 愛知教育
大学教育実践総合センター紀要, 12, 335-342.
- 石本雄真（2011）．現代青年における友人関係の特徴と心理的適応および学校適応との関連 発達研究, 25, 13-24.
- 石本雄真・久川真帆・齋藤誠一・上長 然・則定百合子・日湯淳子・森口竜平（2009）．青年期女子の友人関係ス
タイトルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20 (2), 125-133.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護（1994）．青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学
研究 42 (1), 21-28.
- 榎本淳子（1999）．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47 (2),
180-190.
- 大久保智生（2005）．青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教
育心理学研究, 53(3), 307-319.
- 太田直美・米澤好史（2012）．大学生の向社会的行動と友人関係及び自己像の形成との関連 和歌山大学教育
学部教育実践総合センター紀要, 22, 29-39.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美（1992）．中学生の学校ストレスの評価とストレス反応
との関係 心理学研究, 63 (5), 310-318.
- 菊島勝也（1999）．ストレスとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究,
7 (2), 66-76.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫（2003）．仲間関係発達尺度の開発—ギャング, チャム, ピア・グループの概念に
そって— 目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫（2005）．女子中学生の仲間関係のプロフィールとストレスとの関連について目白
大学心理学研究, 1, 13-21.
- 齋藤憲司（1986）．思春期における友人関係の発達の变化 東京大学修士論文.
- Sullivan, H. S. (1953) . The Interpersonal Theory of Psychiatry. New York : W.W.Norton & Company Inc.
(中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鐘幹一郎(訳) (1990) 精神医学は対人関係論である みすず書房.)
- 谷伊織（2008）．バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (B IDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討
パーソナリティ研究, 17 (1), 18-28.

- 中島浩子・関山 徹 (2016) . 仲間関係の発達と受容感およびネット利用との関連 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 25, 203-215.
- 福島朋子 (1992) . 思春期から成人にわたる心理的自立-自立尺度の作成及び発達の検討- 発達研究, 8, 67-87.
- Blos, P (1962) . On Adolescence : A Psychoanalytic Interpretation : Free Press. (野沢栄司 (訳) (1971) 青年期の精神医学 誠信書房.)
- 保坂 亨 (1998) . 児童期・思春期の発達 下村晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ-発達と臨床援助の心理学- (pp.102 - 123) 東京大学出版会.
- 保坂 亨・岡村達也 (1986) . キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 保坂 亨・岡村達也 (1992) . キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案 千葉大学教育学部研究紀要第1部, 40, 113-122.
- 本間友巳 (2000) . 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48(1), 32-41.
- 文部科学省 (2015) . 平成 25 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.

